

タイトル：脱柱状化時代のオランダにおけるムスリム移民の社会的排除／包摂

Social Exclusion and Inclusion of the Muslim Immigrants in the Dutch Depillarisation era

発表者：久保幸恵（神奈川工科大学・非常勤講師）

Yukie Kubo / Kanagawa Institute of Technology, Lecturer

キーワード：社会的排除／包摂、オランダ、脱柱状化、ムスリム移民

本発表では、オランダで進行しつつある「脱柱状化」の過程におけるムスリム移民の位置づけを、「社会的包摂」と「社会的排除」という2つの側面から分析することで、現在のオランダで、なぜポピュリストが人気を得ているのかを明らかにする。社会的排除とは、「貧困」や「剥奪」といった概念に加えて、個人やコミュニティの「社会的な参加・つながりの欠如」も含めた動的な概念である（福原、2007：15）。社会的包摂は、社会的排除と対になる概念であるが、どちらか一方が起こる場合は、もう一方は起こらないといった排他的関係にあるわけではない。高橋誠一は「<他者>という存在がおかれているのは包摂でもあり排除でもある」という「二重性の問題を見落として」しまうことに警鐘を鳴らしている（高橋、2011：256）。オランダにおいても、ムスリム移民はあらゆる面において社会から排除されているわけではなく、彼ら／彼女らを包摂する動きも存在している。本発表では、ムスリム移民を「他者」として排除／包摂する過程を動的に分析することを通じて、オランダ人の「我々」意識の一端を明らかにする。

オランダは、第二次世界大戦後の高度経済成長期にトルコやモロッコからの労働者をリクルートした。彼らは、そのほとんどがムスリムである。さらに、旧植民地のスリナムから本国に渡った人々の中にも、やはり旧植民地のインドネシアからスリナムへと移住した人々も含まれており、彼ら／彼女らもムスリムである。オランダには第二次世界大戦の20年後ほどまでは、柱状化と呼ばれるシステムがあった。例えば、カトリックの人々は、カトリックの病院で生まれ、カトリックの学校へ通い、カトリックの政党に投票し、カトリックの労働組合に参加し、カトリックの肉屋で買い物をし、カトリックのカフェでくつろぐといった生活を送っていた。柱状化をシステムとして見れば、1960年代半ばから徐々に溶解していったと見ることができる。しかし、柱状化の時代に整えられた制度や法律の一部は現在に至るまで残っている。

ムスリム移民は、それらの残存した制度や法律を使って、ムスリム専用の国営組織を作った。1988年に最初の公立イスラム小学校、1986年には国営イスラム放送局、1995年には国営イスラム高齢者組織が作られた。これらの組織は、国庫によって100%の資金援助がされるが、設立のためのイニシアティブや経営は、全てムスリムの手によって行われる。これらの組織のあり方は、「社会的包摂」の例を示していると言えるだろう。分離して包摂するというコミュニタリアンな多文化主義の事例であり、他のオランダに伝統的な宗派、イデオロギーに基づいた組織と同じ法律・制度に則った組織である（久保、2016）。

しかしながら、ムスリムの国営組織の設立は、オランダ社会へ「包摂」する動きであると捉えることができると同時に、「排除」の過程と捉えることも可能である。ムスリムがオランダに移住し始めた1960年代から、彼ら／彼女らが国営組織を作った1990年代までは、「脱柱状化」とよばれる過程が進行していた時代と一致している。「脱柱状化」とは、人々の教会離れが進んだことや、労働組合への参加率が減少したこと、既存の「柱」に属していない政党が支持を広げたことや、既存の柱に属していないテレビ局が設立されたことなど、人々が「ゆりかごから墓場まで」自らの集団の「柱（宗派もしくはイデオロギーに

基づいた集団)」に属する組織に参加するだけで一生を終えていた状態が徐々に「溶解」し始めた過程を指している。社会の一元化が進みつつある中で、ムスリム集団が固有の組織を作ったことは、オランダ社会からムスリム集団を「隔離」あるいは「排除」するという結果を招いたという側面も持っている。

これまでの移民研究では、ムスリムがオランダに移住し、国営組織を作った時代が、脱柱状化の時代と一致していることは偶然だとされてきた (Rath et.al., 1996, 他参照)。しかしブラッケ (Bracke ; 2013) によると、ムスリム移民の存在があったからこそ、脱柱状化の過程が進んだ。柱状化の時代において人々は各柱にアイデンティティを置いていたが、ムスリムの柱が出現すると同時に他の柱が溶解する過程において、「リベラル」、「モダン」、「セキユラー」といった漠然とした概念に基づいたナショナル・アイデンティティが徐々に成立してきたとされている (Duyvendak, et.al., 2008 : 35-43, 128-129)。その際にムスリム移民の存在を「他者」として、「(ムスリム移民以外の) 我々」は「リベラル」、「モダン」、「セキユラー」といった価値観を備えているとされた。すなわち、このような価値観を中心として「我々」と「他者」の境界線が新たに構築されているのである。さらに、ムスリム移民と価値観を共有していないという前提は、ポピュリストの政治家が彼ら／彼女らの排除を訴える根拠の一つとして利用されている。ポピュリストの訴えはますます支持を拡大しており、2017年3月15日の議会選挙で、ウィルダースの自由党 (P V V) は2番目に多い得票率を得た。

結論として、オランダ社会はムスリム移民を包摂する契機を持ちながらも、同時に排除している。脱柱状化が進展しつつある現在において、時代に逆行するかのようムスリムの柱が作られた。このことによって、ムスリム移民たちは逆に「(オランダ人である) 我々」のアイデンティティが形成される過程で他者としての役割をわりあてられ、排除される結果になった。

- ・久保幸恵、2016「リベラル・コミュニタリアン論争の視座から見たオランダの多文化主義—ムスリム移民問題に焦点をあてて」日本イスラム協会編『イスラム世界』85号
- ・高橋誠一、2011「<他者>の統治とシティズンシップ—包摂／排除のメカニズムとそのグレイゾーンをめぐって」法政大学社会学部学会編『社会士林』57(4), pp.253-268
- ・福原宏幸編著、2007『社会的排除／包摂と社会政策』法律文化社
- ・Bracke, S., 2013, “Transformation of the Secular and the ‘Muslim Question’. Revisiting the Historical Coincidence of Depillarisation and the Institutionalisation of Islam in The Netherlands, *Journal of Muslims in Europe*, 2(2), pp.208-226
- ・Rath, J., Penninx, R., Groenendijk, K., Meijer, A., 1996, *Nederland en Zijn Islam; Een ontzuilende samenleving reageert op het ontstaan van een geloofsgemeenschap*, Spinhuis
- ・Duyvendak, J. W., Engelen, E., Haan, de I., 2008, *Het Bange Nederland; Pleidooi voor een open samenleving*, Bert Bakker